

低年齢でも安全に出産可能な技術の発展により、近年問題となっている少子化対策は大胆な方針に舵を取り始めた。

結婚可能年齢が

大幅に引き下げられ、少女妊活時代が幕を開けた。

肥満ぎみで今まで

モテなかった僕は
その恩恵を

実感することになる……

家の近所の公園で

よく見かける

女の子たちのひとりが、
僕に告白してきたんだ。

「ぼ、僕で本当にいいの?」

「がんばれっ ちーちゃん!!」

ドキ

ドキ

「う、こんなお腹で良ければ、
いくらでもっ!
よろしくお願いします!」

「はいっ!! 私のカレシになってほしいんです!!
それで……お、お腹を触らせてくださいっ!!」

「やったあ!! さっそくお腹を……」

「ここは人目があるから
うちでいいかな?」

「はいっ!!」

こうして、ロリコンでカノジョも
いない僕にも、ちいさくてかわいい
カノジョができてしまった。

嵐 千砂都

澁谷 かのん

「ついたよ。ここが
ぼくのおうちです」

「おじやましますっ!!」

「おじやましますっ!!」

「えっと、」

かのんちゃんも?」

「へんなことしないか
見張ってますっ!」

「あ、はー……」

念のためにカーテンは
閉めておこう……」

「えっ……」

ち、ちーちゃん!」



「えっ?」

「んっお、おっおっおっ♡」

んーっ

えっっっ

「な、なにをしてるのかな……
お腹をさわるだけなんじゃ」



「それはそうかも
しれないけど……」

「おうちの中華なら裸になっても
怒られないから、お肌 напрямую
さわってもいいですよっ!!
そのほうが、しっかりとお腹の感触を
確かめられますっ!!」

「おにいさんも服を脱いでくださいっ!!
さあ、はやくっ!」

「は、はー……」

彼女の妥協を許さない
本気の目を見て、
僕は迷うことなく
服を脱ぎ捨てた。



「わあ……♡ まあるいお腹だあ♡
あったかくて、ぽよぽよしてる……♡」

うっ……
なんて大胆な手つき……

「もう、がまんできません……!!
えいっ♡」

が
ハッ

柔らかい素肌が……
お腹どころか
あそこにも当たって……

「わあ……
ちーちゃん すごおい!!」

「わあっ!!
そ、そんなことされるとっ……!!」

ああっ……
抑えきれなかった……

「あっ♡ おちんちん大きくなったんですか?」
「ご、ごめんね。びっくりした?」
「それって赤ちゃんが
ほしいうって合図なんですよね?」

「赤ちゃん!?それはっ……
そっいうことなんだけど……」

「学校で勉強しました!!
わたしに任せてください!!」

ムクッ

ムク

ブッ



んぽっ

んっ

くぱっ

へんげん



へんげん

どっ

「おち○ちん……♡
しっっかり調べますから
お兄さんは膣穴を
しらべて見てくださいな♡」



あ……

どっ

ひくひくと……く膣口は
惹きつけられ
つい、舌先を伸ばしてしまっ!!
小さな穴なのに、
思った以上に抵抗なく
広がる……



「わっ……」

「お腹、変だよぉ♡」



キムン!

「そ、それって、
どういうっ……
調べてどうにかなる うっ!!」



あそこが丸見えだ……
な、なんて大胆な……



ハッ

「う、うん……
これなら本当に入るかも……」

「やったあ!!」

「もう入れるくらいに
なりましたか?」

「す、すごいよ!!
どんどんやわらかくなって
広がってる……!?!」
どんな技術かわからないけど
法律で結婚もできるようになるわけだ……



ヌフッ

ヌフッ

「どうですか? おち○ちんの大きさや長さを
しっっかり確かめれば、それに合わせて
広がるんですよー♡」
「授業でデイルドを使って
確かめました♡」

「も、もう限界っ！
赤ちゃんの素、ちさと赤ちゃんの
中に出すよっ!!」

ガバツ

ズツ

「いっ……イクっ!!」

ズツ
ズツ
ズツ

「もやっ♡」

ヌル

ブルル

あ、

「はいっ♡
わたし、ママになりますっ!!
かわいい赤ちゃん、くださいねっ♡」

は、

ズツ
ズツ
ズツ

ムルムル
ムルムル
ムルムル

「僕の赤ちゃん産んでっ!!
お嫁さんになって、
その歳でママになって!!」

ハッ

ムルムル
ムルムル
ムルムル

ハッ



「あつ♡
おなかの中に……
いっぱい、おろすすっ♡」



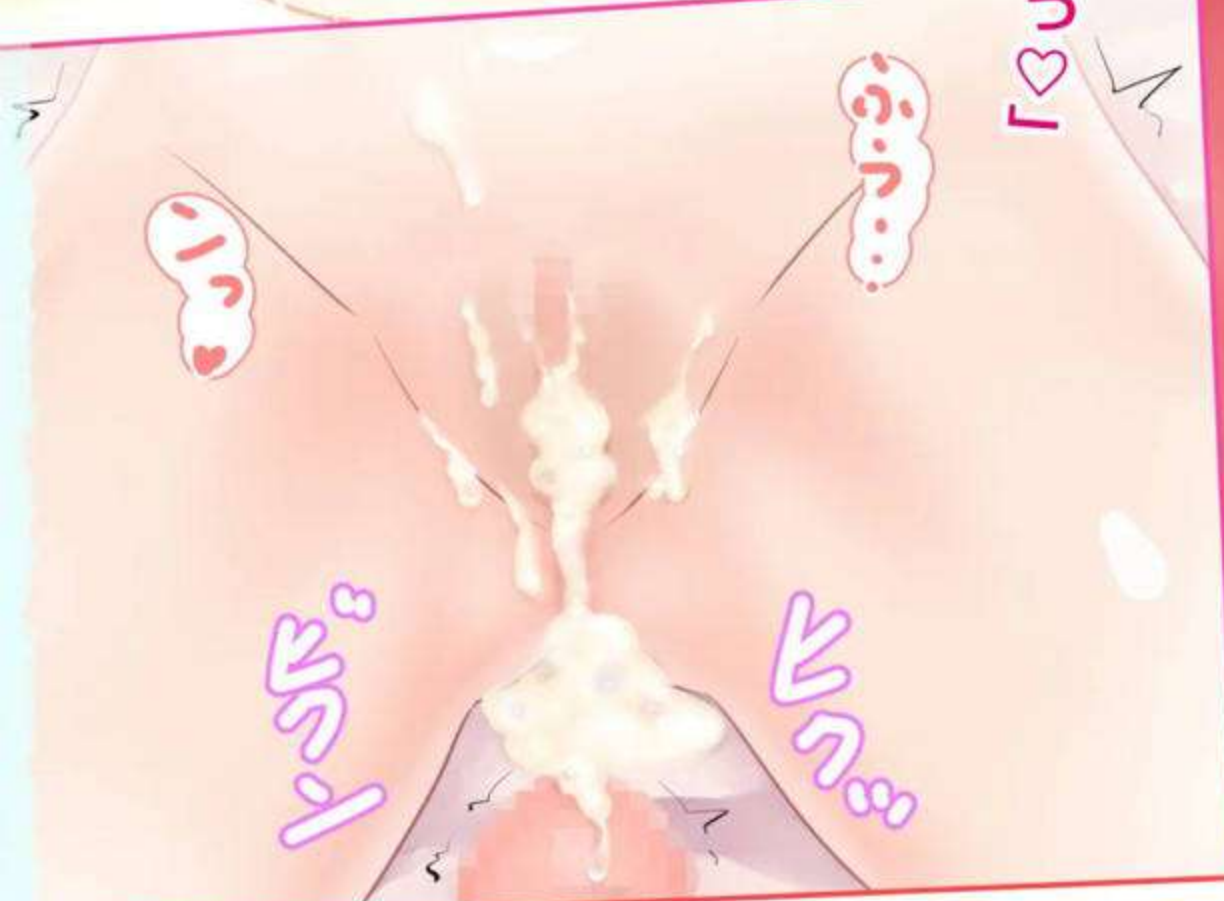
ドブッ

ドブッ

「子宮にっ……
注ぎ込むっ!!」

ビクッ

ビクッ



ドブッ

ビクッ



「わっ……
わたしもお兄さんのっ!!!」



「おっ……
お兄さんっ!!!」



「かのんちゃん?
そ、その恰好は!?!」



ハ?

「お嫁さんになりたいです!!!」

「カノジョにっ……」



「だ、大丈夫だった?」

「はい♡
おなかいっぱいです♡」

「かのんちゃん、
見てみてっ♡
あふれだしちゃった♡
これがほんとの
赤ちゃんの
素なんだあ……♡」

ドブッ



「ん……ッ♡♡♡
広がってきたよ♡」



「はむっ……
すっぴんおまきいよお♡」

なし崩し的に
もうひとり、カノジヨ……
お嫁さんが増えてしまった



「ちゃんと入るように
手伝ってあげるね♡」



「はんっ!!
だめだよおっ……♡♡♡
そんなにするよっ!!」



「うんっ!!
ほくのほうの準備は
できてるよ!!」

「おち○ちん
入る準備できたよ♡
かのんちゃんもお嫁さんに
してあげてください♡」



「あっあっ……
はああああっ……
はあんっ!!
どっどっせやうっ……♡♡♡」

パシャッ

ブルルッ

ガッガッ

ハッ

ヌプッ

グッ

ハッ

「はいつ……んっ！
は、入ってきてるよお♡」

「今から入れるよ……
つらかったら言ってね？」

「はじめはすっごく苦いっ
かもしれないけど、
すぐ楽になってくるよ♡」

ズッ

「う、うんっ！ハッ
すごい……慣れてきたかも
あっ……だんだんきもちよく……♡」

ゴッ

ズッ

ズッ

ズッ

ハッ

「ほうんっ♡
な、なにこれえ……♡
こんなの、はじめてだよおっ♡」

「わあ……♡
すっごい、いっぱい
入ってきてるね♡」

ハッ

ズッ

ヌッ

ヌッ

「あっ……おなかのなか、
おち〇ちんでいっぱい♡
びくびくが伝わってきてる♡」

ハッ

ハッ

ハッ

あ、



「わたしもキスっ!!
したいですっ!!」

「うんうん!!」



「おちのちんふくらんできたよ
もうちゅっ!!とて、精子出そうっ!!」

「か、かのんちゃんっ!!
射精すよう!!
赤ちゃんの素、
中に出すからね!!」

あ...

あ...

はっ...

ぶぶ

どっど

「赤ちゃん産んでっ!!
かのんちゃんも
これで僕のお嫁さんだよっ!!
ママになるんだよっ.....!!」

ハッ

ブブブブブブブブ

「はいっ♡
ママになるっ!!
可愛い赤ちゃん産みたいっ♡」

ぶぶぶぶぶぶぶぶ



あ...

ハア

どっ

「あっ.....!!
どんどん入ってくる♡
お腹の中いっっぱいに
なってるよおっ♡」

ハア

どっど



「はあ.....
すごかったよお♡」

どぶ

「頭真っ白っ!!
なっちゃんっ!!
♡」

どぶ

どっど

—そのあと僕は何度も二人に
精を注ぎ込んだ……

「いっぱい、
出してくれましたっ♡」

「も、もう出せないよっ……!!」

「えへへ、これ以上は
入れても入れても、
すぐ出てきちゃうよ♡」

「赤ちゃん楽しみですっ♡」

「きつとすぐ逢えるよねっ♡」

——予言めいた言葉の意味……
ふたりの胎内に変化が起こっていたことは
すぐにもわかることになる……

「改めて……ふたりとも
よろしくねっ!!」

「はいっ!!
末永くおねがいますっ♡」

二人の声がきれいにそろって
元気な返事がかえってきた。

絶対に幸せにすると
決意を新たにして
二人の手を握り締めた……





「さあ、今日も確かめようね！」

——エッチをしたあとの日は、必ず赤ちゃんができていないかを確認するようになった。

そしてつい……

プシュッ

プシュッ……



「やったあ♡
赤ちゃん、お腹の中にいるよっ♡」

「ふたりとも、おめでとう！
ぼくを好きになってくれて……ありがとう！！」

「わたしも、ほらっ！！
赤ちゃんできましたっ♡」

ふたりは母親になる……

「おなかの膨らみも
だいぶ、めだつてきたね」

「はやく
逢いたいなあ♡」

「楽しみだね♡」

「まん丸たまたま、
おうちのなかれ
ころころっ♡
しまあふ……んっ♡」

ふたりが妊娠してからは、
直接的な性行為を控えるようになった。
それでも甲斐甲斐しく、
ふたりは僕のシモのお世話をしてくれている……
最高のお嫁さんたちだ!!

「んっ……」

「んっ……
いーぱい出ましたあ♡」

「わぁっ……♡
すっすっ飛んでるっ……」

「ぶっ……ふたりととも、
今日もありがとっ」

「んぶっ……♡
あかちゃんのもと、
らしまひびゅうね♡」

「んっ……
ふ、ふたりとも、
気持ちいいよっ♡」

おっ……

あはっ……

わっ……

ド
ド
ド
ド

ド
ド
ド
ド

ド
ド
ド

ド
ド
ド

あむ

んっ

んっ

んっ

んっ

んっ

「赤ちゃん
産まれたときのために
おっぱい
出やすくしようね♡」

ふたりのお腹はどんどん
おおきくなってきて……
存在感を増してきていた。
そしてなによりも変化したのは、
母乳が出るようになったことだ。

「はあい♡
いっぱい飲んでくださいねっ♡」

「赤ちゃんみたいっ……♡」

チュウチュウ！

「あっ……♡
そんなにぎゅって
吸い付いちゃだめですっ♡」

「かのんちゃんもっ……
おっぱいいっぱい出そうねっ♡」

「はいっ♡ はあんっ……♡」

「おいしいミルクいっぱい出たね♡
赤ちゃんもこれなら、
満足するよ♡」

「えへへっ……♡
楽しみですっ♡」

「いっしょに練習っ♡
えへっ……♡
こうかなあ♡」
ぼくを赤ちゃん代わりに
上手におっぱいをあげる練習に
3人で夢中になった……

ぼくたちは
ついに待ち望んだ
出産の日を迎える……

分娩室

「今から産んであげるからね
逢えるの楽しみっ……♡」

「ママたちが
頑張って産むところ、
しっかり撮っておくわ♡」

「ふたりとも、
準備はいい？
ぼくも微力ながら
手伝うから
一緒に頑張ろうね♡」

「うんっ♡
一緒にいてくれるだけで」

「心強いですっ♡」

「あっ……赤ちゃん出たがってる
んっ……ふうっ……♡」

「すげー……
内側から
ふくらんできこえるわ」

「あっ……
はんっ……♡
どんどんぽんぽん♡」

「はんッ……
ぐう♡
あたまっ
でてきたあ♡」

「あっ♡
もう少しで……
逢えるねっ♡」

「がんばって……
もう一息っ!!」

ブーン!

ポコン!

「お疲れ様、ふたりとも!!
いっぱいがんばったね!!」

「はあっ♡
丸くってちいちゃくって
かわいいよお……っ♡」

「やっ……たあ♡
赤ちゃんに逢えたあ……♡」

ドポザ!

ドプ!



「赤ちゃん
あつたかあい……♡
あつ!!
元気に泣き声聞こえてきたよ♡」

「まんまるで
あつたかくて、
すっごくふかふかが気持ちいいよお……♡
ママがしっかり
お世話してあげるからね♡」

大きな仕事をやり遂げた彼女たちの表情は、
幼げながらも慈しむ母親の表情をしていた。

「はい、
ママのおっぱいおいしいでちゅかー♡
いっっぱい飲んでね♡」

——その後……二人は
赤ちゃんに初めて母乳をあげられた
喜びに終始笑顔だった。
この先、僕たちにはまだまだ
初めてなことがいっぱいあるだろう……
楽しい妄想が現実になるように
僕はさらに努力しようと誓った……

「いっっぱい飲んで
大きくなるうねえ♡」